
美星学園生徒部！(仮)

毒林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美星学園生徒部！（仮）

【Nコード】

N0619X

【作者名】

毒林檎

【あらすじ】

理由も分からず留年させられた主人公、有城雪と、もう一人の被害者、中村龍司が、自分達の輝かしい未来に向かう為、留年を取り消そうとするが……？

プロローグ【さらば内定、さらば卒業】（前書き）

文は支離滅裂な感じでかなり読みにくいというか読めるのかも分からないですが、よろしく願います。今回が初作品ということで、とりあえずなんでもいいから最後まで書き遂げる事を目標にします。話の趣旨ぐらいは分かるよう頑張ります。

最後まで読んで頂けると幸いです。

プロローグ【さらば内定、さらば卒業】

生徒会。

それは学校に在籍する生徒の中のごく一部で構成される、生徒会組織の唯一無二の最高機関である。

そう、「最高機関」なのだ。それ以下でもそれ以上でもない。その定義を誰もが覆すことはできない。

私立美星学園。この学校にも、もちろん生徒会がある。定義の通りに生徒組織の最高機関である。……昨年までは。

「ああ、やっとこの日が来たのかあ……」

今日は四月十三日。誰もが分かるように卒業式だ。僕は今日を持ってこの学校を卒業した。今手に持っているこの卒業証書がそれを物語っている。ああ、なんて清々しい気分なんだろうか。

「おい雪^{せつ}、てめえまだ就職の内定も決まっていらないなあ。ざまあみるってのばあーか！」

ちっ……面倒臭い人間に会ってしまった。こんな乱暴な口を叩くこいつの名前は中村龍司^{なかむらりゅうじ}。幼稚園から今まで同じ学校で同じクラスの腐れ縁だ。

「龍司だって変わんないじゃないか。自衛隊なんて所詮は脳味噌まで筋肉になった野郎が行くゴミの掃き溜めじゃないか！」

「ほお？ ゴミがよくそんな事言えるなあ？ それは俺への宣戦布告と受け止めてもいいんだよな？ 雪君」

「望む所だよ龍司。卒業式には決着をつけてやろうと思ってたよ！」
龍司が臨戦態勢に入っただけから僕も迎え討とうと身構える。今出せ

るありつたけの力を龍司に叩き込んでやるんだ！

「ちよつと待て？」

龍司がピクリと動いた瞬間、校門に怒声が響き渡る。振り向くとそこには仁王立ちをしている筋肉の塊、『筋塊』が居た。筋塊は僕らの方に歩み寄ってくる。心なしか口元が緩んでいるようにも見える。余程良い事があつたのか、それとも僕らに何か言いたい事でもあるのだろうか。そう考えている間に筋塊は僕らの前にどつしりと構えてくる。

「お前ら何をやっている」

「もちろん龍司との最後の決着を決める戦いですよ。今日で龍司とは二度と会わなくなるんです先生。という事はこいつの曲がった根性を叩き直せるチャンスも最後なんですよ。今日だけはやめると言われてもやりますよ」

「そうだ先生。もう会う事はないからこそこの減らず口を黙らせてやらなきゃいけないんだよ。注意するつもりなら黙ってくれないか。どうせ先生とも今日で会う事は無いんだ。最後まで見逃してくれ」
「そうだ。僕が今先生に構っている暇はない。それに龍司の言う通りこの筋塊とも今日限りなんだ。最後まで邪魔をされてはたまつたもんじゃない。」

「黙らんかお前達！」

再び怒声が響く。筋塊の丸太のような腕が僕らの肩に置かれた。

「安心しろ。お前達はまた来年からこの美星学園に通ってもらう。もちろん中村の内定は取り消し。有城に至っては就職先も探すことさえできない。ということだ」

「「って事は……」」

まさか……

「そのまさかのまさかだ。お前達は……留年だ」

へえ……留年ねえ。

「「はあ??」」

留年って何？ え？ あの留年？ どうしよう、あまりの衝撃に

頭の回転がついていかない。僕は夢を見てるのかなあ。それとも
筋塊のドッキリかなあ。隣を見ると龍司も口をぽかんと開けている。
あまりの衝撃に動揺を隠せないらしい。

「お、お、俺が留年……俺が……俺……が……」

龍司がこんなに取り乱すのは初めて見た。そうだな、僕はとも
かく龍司は就職内定を取り消されたんだもんな……ざまあみろ。

「お前達は何を考えているのかは俺の知ったこっちゃないが、お前
達は来週から『三年A組』の生徒になるからな。じゃあまた来週会
おうか。あっはっはっは！」

筋塊のいやらしい笑い声に腹がたってくる。龍司は変わらず口を
パクパクさせている。

こうして、僕らの終わった青春が再び幕を開けた。というが無理
矢理開けられたのだった。

ブログ【さらば内定、さらば卒業】（後書き）

書き終えた僕の感想としては言葉とか変かなあと…まあ、とりあえず書きます！

少し語り部雰囲気がバカテスを彷彿とさせますが、話はきちんとちがいますし、バカテスの方が数千倍面白いのでご安心下さい。

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます。

できれば感想の方も書いて頂けると幸いです。

2【無いはずのR組】（前書き）

遅くなって申し訳ございません

2【無いはずのR組】

「く……卒業式が終わった直後に学校に登校しなきゃなくなる
とはな……」

あれから一週間がたったこの日。龍司りゅうじが重い口を開いた。もう来るはずはないとおもっていた忌わしき校門前で。

「とうかなんで僕が龍司と一緒に学校に来なきゃならないんだよ
！」

「それはこっちのセリフだ！ と言いたい所だが今回ばかりは仕方がない。この状況になった以上、俺達は常に二人で行動しなけりやいけなくなる。何で単位が足りていたのに俺とお前せつだけが留年したのかが気になるし、何か色々と面倒な事が起こる気がするんだ。顔見知りもお前しか居ないしな」

確かにそうかもしれない。僕らより頭が悪くて問題児な生徒も他に居るはずなのに、なぜ僕達だけが留年という絶望的状況下にいるのだろうか。全く理不尽な事この上ない。そして僕も、何か不吉な事が起きるような気がする。しばらくは龍司と一緒に行動するのが賢明かもしれない。

「あれ？ でもなんで留年が二人だけって分かったの？」

「バカかお前は。卒業式の際に猪田先生が三年A組だって言ったただろ？ 本来なら留年クラスのR組が作られるがな。だからR組が無い今年は俺とお前しか居ないだろ」

龍司の言う事は合っているし、二人だけだという確証はないけれど、猪田先生もとい筋塊の発言により、R組が無いと言う事は、留年生は多くても四人程だと思う。けれどなにかがひっかかる気がする。これが気のせいであればいいんだけど……。

「おい、ボーツとしてんなよ、行くぞ」

うん、と相槌を打つ。神様、何も起こりません様に。

「おい、どういう事だよ先生。空き教室だと思ったらこれだ」

教室へ向かうはずだった僕達が今居る場所は職員室。そうだ。早速問題が起きてしまったのだ。

「うるさいぞ中村。一体どうした」

「とぼけるなよ！　なんでR組があるんだよ！」

「今頃何を言っているんだ？　例年通りだろう」

「そんな事言ってるんじゃないやねえよ！　なんで俺達は留年なのに隔離されて普通のクラスなんだよ！　それともなんだ？　留年じゃねえのに無理矢理留年扱いにしたからなのか？」

龍司が机を思いっきり叩く。龍司は相当怒っているけど、僕も大分怒り心頭。だってR組があるって事は僕達が留年する理由が無い事の証明にらしかならない。じゃあなんで僕達は留年させられた？　「まあ、詳しくは俺も知らんからな。だがな、何をやっても留年を取り消す事はできないぞ。」

「じゃあ、誰が卒業を取り消したんだよ」

「……」

僕達の卒業を取り消したって事は相当な権力者だと思う。けれど先生が黙るって事は先生じゃないもつと上の誰かが取り消したに違いない。あいにくそんな権力者と知り合った覚えはないけれど。

僕の持論を展開しようと口を開こうとすると、黙っていた筋塊が鼻をくじく。

「ふむ、全て知りたいなら生徒会に行ってみろ……現実を突きつけられるだけだぞ」

すると龍司はこれを狙ってたかのようにニヒルに微笑んだ。

「その言葉に二言はないな？」

筋塊の返事を聞かないまま、僕達は脱兎の如く職員室から飛び出した。

3【承認と真犯人】

「案外早くここから出られるかもしれないぞ」

職員室から出た龍司は歩きながら嬉しそうにそう言った。

「え、なんで？」

僕には龍司の言ってる事が理解できない。こんな事を言うのだから何かの勝算があつて言つてると思ふけれど、今この状況で何故こんなに自信に満ち溢れた表情なんだろう。ただのバカなの？

「お前はバカか。早い話、留年の定義を無視して不正に留年させたんだから、卒業を取り消して留年させた奴らに直接会って話せばいいだけだ。なんと言われようと不正は不正だ。無理矢理に理不尽を通そうとするならそれは犯罪になりかねないだろ。だから取り消した奴に直接会いたかつたんだ。だがそんな甘い考えじゃ駄目だと思つて自分で探ろうと思つたが……その必要もないみたいだしな」

龍司の作戦は完璧だった。核心に少し迫っただけで猪田先生、以下筋塊が黒幕の正体をばらすとは。おかげでこっちの時間が省けたみたいだ。いくら黒幕が理論武装した所で駄目なものは駄目。これなら勝てる。

「晴れて明日から社会人の身かあ」

「いやお前は無理だろ」

流れて流せばいい事にツツコミを入れてくる龍司には少し余裕があつた。たのもしい味方が帰ってきたような気分だ。

「着いたぞ。ここだろ？」

校長室のドアじゃないかと思うくらい大きな木の漆塗りのドアを指差した龍司が微笑む。ドアの右側には、美星学園生徒会と達筆な習字文字で書いてある。まずここが生徒会室で間違いないだろう。「確かにここだね。けどまだ誰も居ないんじゃない？ ホームルームの時間だし」

もっともらしい僕の言葉に、龍司はそうだなと応答する。けれど

その瞬間、後ろからはつきりとした威圧のある声が聞こえた。

「おい、お前ら何をしている。まだホーミングの時間だろうが。それとも我が生徒会にホーミングをほっぱり出す程の用があるとしても言うのか？」

振り向くのをさえ躊躇う程の威圧感。すぐにただものではないと分かる。透き通った声で女だと分かったけれど、それに見合わない言葉使い。僕達は一瞬の恐怖に、ワントンポ遅れて振り向く。

「え……」

僕達の目に映ったのは、学校に似つかわしくないシユールな光景だった。

「お、お前、なんで、ここに……」

龍司がうるたえる。この人は……

「あ、龍司の姉さん！！……えと、真帆^{まほ}さんだ」

「正解」

目の前に居たのはそう。龍司の姉さんだった。頭脳明晰、スポーツ万能の上、人望もかなり厚いという完璧人間なのに、社会人になった今、二十歳とは思えない程の童顔、中学生程の身長しかないというちよつと残念な人だ。僕はストライクゾーンだけど。……こうして龍司と真帆さんが並んでいると、龍司が兄で真帆さんが妹に見えるのは……気のせいだよきつと。

「なんでお前がここにいんだよ！ 仕事はどうしたんだよおい！」

龍司が鬼の形相で姉を睨みつける。けれどそんなものは通用しなかった。

「お姉ちゃんになんて口聞くの。前までは『真帆姉』って呼んでたくせに」

「うるせえ！ そ、そんな事よりなあ、お前何してんだよ」

「うん。名誉会長の仕事？ みたいなやつ。私生徒会長として偉大な功績をたたえられた訳だし」

えっへんと言わんばかりに無い胸を張る真帆さんが可愛くて仕方がない。

「名誉会長って何だよ聞いてねーぞ。あ、お前今の会長どこに居るかとか分かんないのか？」

「えへへへ（ナデナデ）」

「人の話を聞けえー！！ 雪も頭撫でてんじゃねえー！！」

う……つい手が。最初の目的さえ忘れてしまいそう。けれどふざけていた真帆さんが急に真顔になった。留年についてなにか知ってそうな予感がす……

「もうちよつと優しく撫でてよ」

「ふざけんなコラー！！」

（一時間後）

「はい……全部話します」

「おう」

一時間に渡る龍司の説教によりようやく本題に入った。場所は生徒会室隣の空き教室だ。真帆さんが口を開く。

「真面目に話すから聞いてね。私は名誉会長ってさっき言ったでしょ？ 役職は、まあ生徒会をまとめる事。会長より偉いの。助言をしたり、新しい制度が考えられた時とかに、承認するのが私。でね、私が今回ここに来た理由は、あなた達二人の事なの。実は、私もあなた達が理不尽に留年させられたって思ってるのは知ってるの。けどね、それは理不尽じゃなくて正当な留年なの」

「なに？ つまりどういう事だよ」

龍司が詰め寄る。

「落ち着いてよもう。あの……ね？ 実は今年の生徒会から一つの制度の導入案が出たの。それが『留年範囲の拡大』なの。簡単に言うくと、卒業資格を得た者で、特に素行の悪い生徒を留年扱いにするの。……うん」

ここで真帆さんは黙り込んだ。これ以上は言わなくても分かる。「つまりお前がその制度を承認したって訳だな？」

「……うん」

誰もが分かってた。そんな事。教室内に沈黙が生まれる。流石の龍司も言葉を失っているみたいだ。いいようのない無力感が背筋を襲う。しばらく黙っていた龍司がようやく口を開いた。

「お前のせいで……」

龍司の顔が強張る。本当はこんな事言いたくないだろうし思いたくもないだろう。実の姉が原因で留年する事になったなんて。

「……ごめんなさい」

声を絞り出して言った真帆さんの顔も、悲しそうな申し訳なさそうなんとも言えない複雑な顔をしていた。龍司にしても悔し……

「お前のせいで！ お前のせいで俺の自衛隊ウハウライフがハ―レムライフがあー！」

「言いたい事はよく分かった少し黙れ」

悔しい訳がなかった。こいつまさかモテるが為に自衛隊に入った訳じゃないよね？

「モテたい以外に自衛隊に入る意味があんのか？」

「謝れ！ 全世界の自衛隊員に今すぐ謝れ！」

龍司の真剣だかボケだか分からない言葉にツツコミを入れる。バカみたいな発言だけれど、いつの間にかさっきの重苦しい雰囲気は無くなっていた。そのせいか、少し真帆さんが微笑んでいた。もしかすると龍司はこれを計算していたのかもしれない。

「あははっ。……ごめんね。本当に。二人を巻き込んで」

「大丈夫だ。真帆姉は学校の為を思っただけだろ？ それなら仕方ない事だ。落ち込むなよ」

龍司の言葉に感動したのか真帆さんは体を震わせている。優しい奴……

「あっはっはっは！ そうよね！ 私天才だし！ 名誉会長だし！ 偉大だし！ 落ち込む事ないよね！ いやーあたしバカだったわ。実はさあー適当に判子押してたらその中に入っててさあー。本当参ったよねー。焦った焦った」

「「そこに正座しろ！」「」
僕達の一番の敵は、真帆さんかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0619x/>

美星学園生徒部！（仮）

2011年11月29日16時50分発行